平成 25 年度工学系共通経費による顕彰と研究助成 成果報告書

所 属	理工学研究科建築学専攻
研究者 (ふりがな)	山崎 鯛介 (やまざき たいすけ)
タイトル	堀口捨己の設計作品に見られる和風意匠の特徴とその形成過程に関する研究
助 成 名	他機関から採用となった准教授 (講師) への研究推進のための助成
採択金額	1,200,000 円
研究の背景 堀口捨己 (1895-1984) は、日本近代を代表する著名な建築家であるとともに、茶室・庭園研究の第一人者としても知られている。堀口捨己に関する資料は、かつて明治大学と自宅に分けて保管されていた。前者については、堀口の弟子の一人である木村儀一 (元明治大学教授) を研究代表者に、平成 9~11 年度に科学研究費補助金を得て、筆者も加わりその膨大な史料の整理を行った。その内容は、主として設計に関する図面・その他の資料であり、学生時代の習作から晩年の実作まで、堀口のキャリアのほぼ全てをカバーするものであった。筆者らは、既にこれまで同史料を用いたいくつかの論文を発表している。後者については、平成 16 年 10 月初頭にご遺族から当時筆者の所属していた東京工業大学藤岡研究室に連絡があり、その資料の調査・整理をして欲しいとの依頼があった。調査の結果、その内容は明治大学所蔵史料に欠落していた設計図面 (原図)、堀口の蒐集した蔵書、そして茶室研究に用いたと考えられる古文書類であることを確認し、平成 18~20 年度に科学研究費補助金を得て資料の整理を行った。資料は現在、基本的な整理を終え、東京工業大学藤岡研究室に保管されている。 堀口捨己の和風建築は、建築学会賞作品賞 (1952 年) を受賞した「八勝館みゆきの間」に代表されるように、桂離宮や茶室などの古典に範を取りつつ、現代的な明るさや透明感をも取り入れた独自の意匠を発明したことで評価が高く、またこうした意匠の形成には、戦時中の茶室研究が大きな影響を与えたことも指摘されているが、戦後の堀口の和風建築について、資料に基づく個別研究はまだされていない。	
結果と考察 本研究では、上記をふまえ、かつて堀口自邸に保管してあった資料を分析し、戦後の堀口捨己の作品に見られる独特の和風意匠がいつ頃からどのような経緯で形成されたかを考察した。具体的には堀口資料の中から、以下の作品に関する資料の整理・分析を行った。 ・ 八勝館旧中店 (1953 年竣工) : 青焼き図面一式 (明治大学所蔵)、写真 ・ 三朝温泉後楽 (1953 年 12 月竣工) : 図面一式、 上記資料に加え、あらたに発見された三朝温泉後楽所蔵の建設関係資料一式 (工事関係書類、写真、青焼き図面) を併せて分析した結果、以下のことがわかった。 ・ 茶室風の意匠を取り入れたいわゆる“堀口数寄屋”と呼ばれる独特の室内意匠が最初に登場する作品は、1953 年竣工の八勝館旧中店であること ・ 三朝温泉後楽の初期の計画案 (1951 年) にはいわゆる“堀口数寄屋”の意匠が見られないが、設計が再開された 1953 年の実施案では旧中店と同様の“堀口数寄屋”の意匠が適用され、ほぼ同時期に竣工していること。	

結論と今後の課題

本研究では、明治大学所蔵の堀口捨己資料に加え、あらたに発見された三朝温泉後楽の建設関係資料を併せて分析することで、戦後の堀口捨己の和風建築を特徴づける独特の茶室風の室内意匠が、1953年に竣工した二つ作品（八勝館旧中店、三朝温泉後楽）の設計変更の過程を通じて形成されていったことを明らかにした。

今後の課題としては、以下の作業が挙げられる。

- ・ 八勝館旧中店および三朝温泉後楽のそれぞれについて、計画案などから設計過程をより詳細に検討し、堀口特有の和風意匠が登場する背景を明らかにすること。
- ・ 特に三朝温泉後楽については、既存の民家（徳田家）がどのような形式・意匠であったかについても明らかにすること。
- ・ 戦時中の堀口捨己の茶室研究がどのような形で和風意匠の創出に影響を与えたかについても考察を加えること。

s

使用内訳書

費目	内訳	金額
備品1	なし	0
備品2	なし	0
消耗品	一式 s	1,084,640
旅費	国内旅費（静岡、奈良、京都）	115,360
その他	論文投稿費（	0
合計		1,200,000

記入上の注意：

備品は、品名ごとに記入。

差額が生じた場合は、消耗品で調整。

消耗品を購入しなかった場合は、経費の差額と補填した予算科目名を合計額の内訳欄に記入。